

「人作り・人材育成」－研修業務への我々の取り組み－

第5回：第三国研修＋技術交換事業による農業技術習得

JICA の研修事業への取り組みの中に、日本国内以外で行う在外研修がある。在外研修は、基本的には、日本の技術協力で育成された開発途上国の機関や人材が、自国の人々（現地国内研修）または周辺国の人々（第三国研修）を対象に行うものである。一方、技術交換事業は、隣国における類似業務の視察を通じた研修である。言語、文化、気候が似通った環境で、より多くの人々に対して研修を行えるメリットがあるとされている。

シリアにおける普及分野での専門家派遣業務においては、当時隣国トルコにおいて実施されていた試験農場におけるプロジェクトタイプの技術協力案件を視察するという技術交換事業を実施した。この事業を通してシリア側のカウンターパート達は、JICA が実施するプロジェクトタイプの技術協力活動がどのようなものかを理解する機会を得た。同時に、試験農場で実施されている栽培手法を学ぶと共に、トルコ政府が実施する普及活動の実際を垣間見る事も出来た。気象条件が似通っているため、対象となる作物が同一であり、果樹や野菜の栽培に関しては熱心な討論が行われたことが印象に残っている。

モーリタニアで行われた開発調査では、カウンターパートを隣国モロッコに研修に送り出した。カウンターパート研修員は、アトラス山脈南部地域に広がる乾燥地農業地帯の灌漑による野菜・穀物栽培の状況視察、モーリタニアでも問題になっているナツメヤシ栽培における病害虫被害の状況と対策についての情報収集を行った。また、モーリタニアのオアシス開発を支援しているモロッコの現地 NGO との意見交換も行った。この NGO 組織は、モーリタニアにおける農村生活向上支援の一環として、果樹、野菜栽培、パンの製造方法などの技術移転を行っており、今回の研修もこの NGO の協力のもとに実施された。カウンターパート研修員は、モーリタニアと気候的に類似する地域での研修に加えて、公用語であるフランス語で書かれた多くの技術情報を入手することが出来た。



野菜栽培の状況視察



現地における意見交換

日本は多くの途上国に技術援助、経済援助を行ってきている。しかし、それらの国々の自然および社会環境は日本の状況と大きく異なっている。日本国内での研修は、資機材を活用する施設栽培技術や分析手法の修得、または試験場等で取り組まれている研究の紹介、農協などの組織活動視察などの分野で効果が発揮出来る。しかしながら、栽培試験等の分野では、気象条件の違いがネックになって現地環境適応型の研修計画が立てにくい場合もある。一方、在外研修では類似自然環境のもとで研修が実施されるため、大きな効果が期待できる。また、言葉、生活環境なども類似する地域での研修であるため、研修員も社会・生活環境に適応しやすいという面も重要な要素と考えられる。

このような第三国研修や技術交換事業のあり方の一つとして、以下のような提案をしたい。それは途上国の多くで日本政府の協力により設立・運営されている施設のより多方面にわたる活用である。このような施設の研修活動への利用は、途上国の人材育成ばかりでなく、海外で活躍している日本人技術者との交流にもつながり、現地での意見や技術の交換が可能となる。さらに、このような施設・機関で、日本の青年海外協力隊員、NGO 技術者、専門技術者などの若手研究者を将来の国際協力人材育成の場という観点から受け入れ、これら研究・技術者との共同作業を研修に取り込むようなことが可能ではないだろうか。このような研修形態、技術普及、人材交流の活動こそが、多くの人々に日本の目に見える平和貢献として広く理解されると同時に、多くの友情を育むことができるのではないかと考えている。